

東日本大震災から4年が経過



国土交通省東北地方整備局

秋田港湾事務所 所長 千葉秀樹

【挨拶】

東日本大震災から早くも4年が経過しました。震災により亡くなられた方々に、改めてお悔やみを申し上げます。また、今なお避難を余儀なくされている方々が多数おられます。震災後、ふるさとを離れて暮らしている方々が再びふるさとへ戻り、生活できることを心から祈っております。

【東日本大震災において秋田港が果たした役割】

東日本大震災の影響で太平洋側の港が利用できなくなったことを受け、代替港として能代港、船川港、秋田港などの日本海側の港湾が重要な役割を果たしました。秋田港は被災地支援中継基地として、大震災から2日後には自衛隊北海道部隊がフェリーで秋田港へ上陸、8日後には米海軍揚陸艦が秋田港へ入港し、復旧作業のため秋田から被災地へ向けて出発しました。また、それまで3～5日に1隻の割合で入港していた燃料輸送船がほぼ毎日入港し、宮城県や岩手県などの被災地に燃料が供給されました。また、20日後には太平洋側の港湾の代替港として、秋田港で完成車の荷揚げも行われました。

こうした代替港としての需要拡大に加え、原発停止に伴い秋田県内の発電所向けの石炭や石油の輸入が急増し、さらには、建設資材として製材などの取扱量も増加しました。このように秋田港を取り巻く環境の変化より、秋田港の外貿コンテナ取扱貨物量は、2011年以降3年連続で過去最高を記録するなど、順調に推移しております。

【地域の経済活動を支える港湾】

東日本大震災においては、大規模な地震・津波により港湾機能が停止、また、長期にわたり使用制限を余儀なくされました。そのため、大規模災害発生後も継続した物流機能を保てるよう協議会を立ち上げ、緊急事態に備えた態勢を整えています。

一方、秋田県では、2012年に新国際コンテナターミナルの供用を開始し、その後の拡張工事により取扱能力が7万TEU/年から10万TEU/年へ拡大するとともに、今秋までにガントリークレーン1基の増設を計画しています。

また、今年1月には能代火力発電所3号機建設が決定し、2月には秋田港・能代港の港湾区域内で2021年の稼働を目指した洋上風力業者が選定されました。3月には、電力小売り自由化を見据えた秋田港飯島地区への大規模石炭火力発電新設の動きが公表されるなど、再生可能エネルギーの導入をはじめ港湾周辺における新たなニーズへの対応が求められています。当事務所では、災害に強い基盤を整備するとともに秋田県内の港湾の更なる可能性を見つけ、地域の発展に繋げて参りたいと思います。

【被災地支援中継基地】

自衛隊・消防・警察はフェリーで秋田港に入港し、被災地へ向かった。米軍も秋田港から被災地支援へ。

3月13日 自衛隊北海道部隊
(発災2日後に到着)



3月18日 米海軍揚陸船
(佐世保基地より)



【緊急支援物資供給拠点】(燃料の例)

3日~5日に1隻の割合で秋田港に入港していた燃料輸送船が、ほぼ毎日入港し、宮城県や岩手県に燃料を供給。その後、徐々に燃料不足は解消。

《秋田港への燃料供給ルート》



災害時の物流を担う秋田県の港湾

東日本大震災が発生した際は、太平洋側の港湾機能が停止し、秋田県の港湾は、その代替機能を担った。

能代港

・飼料(八戸港、宮古港、石巻港より)

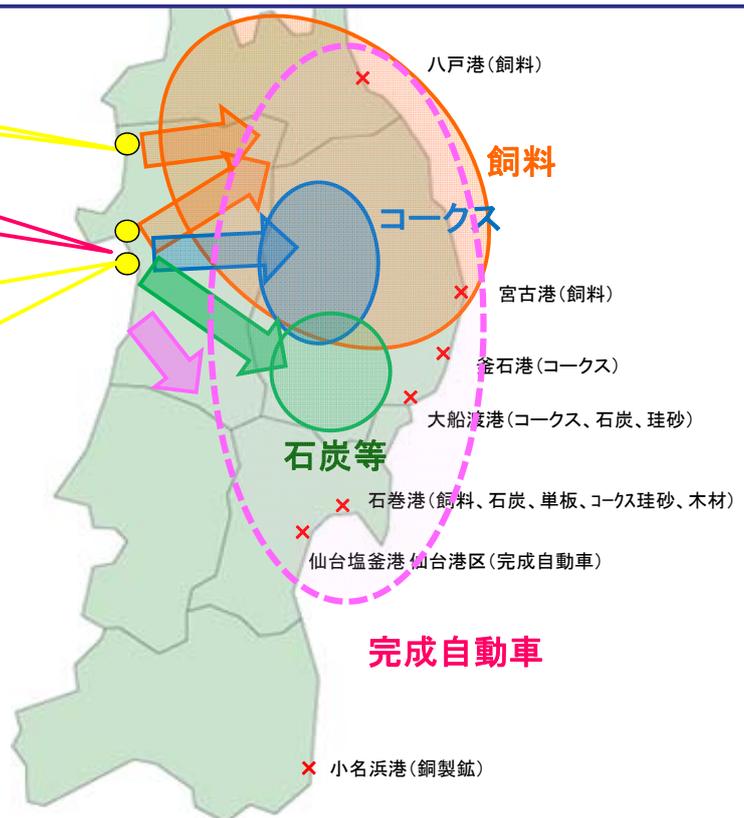
船川港

・珪砂(大船渡港、石巻港より)
※セメントの原料や自動車部品の鑄型として利用

秋田港

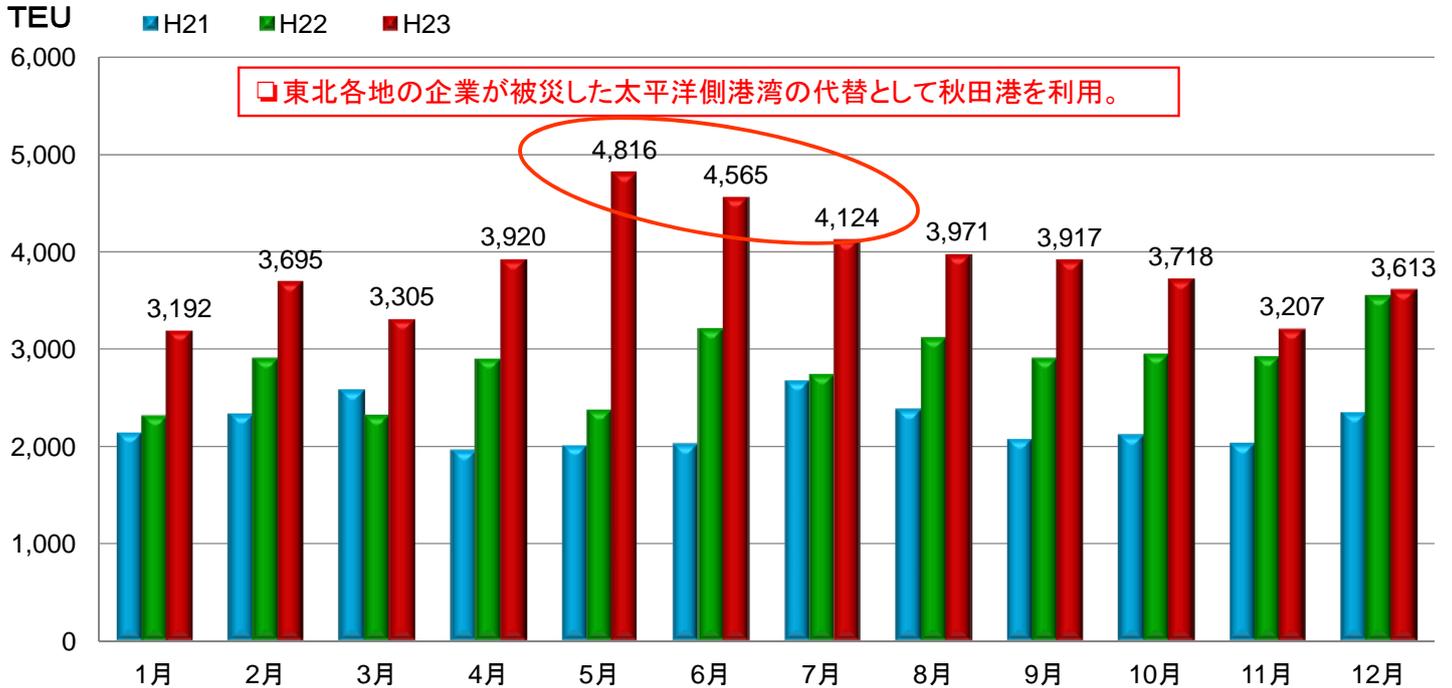
・単板(石巻港より)
・木材(石巻港より)
・石炭(大船渡港、石巻港より)
・銅製鋳(小名浜港より)
・飼料(八戸港、宮古港、石巻港より)
・コークス(釜石港、大船渡港、石巻港より)
・完成自動車(仙台塩釜港より)

2011年3月31日 コークス船の入港
(秋田港)



東日本大震災後は、月4,000TEUを超える利用があったが、太平洋側港湾の復旧とともに減少

秋田港の各月外貿コンテナ取扱量の推移



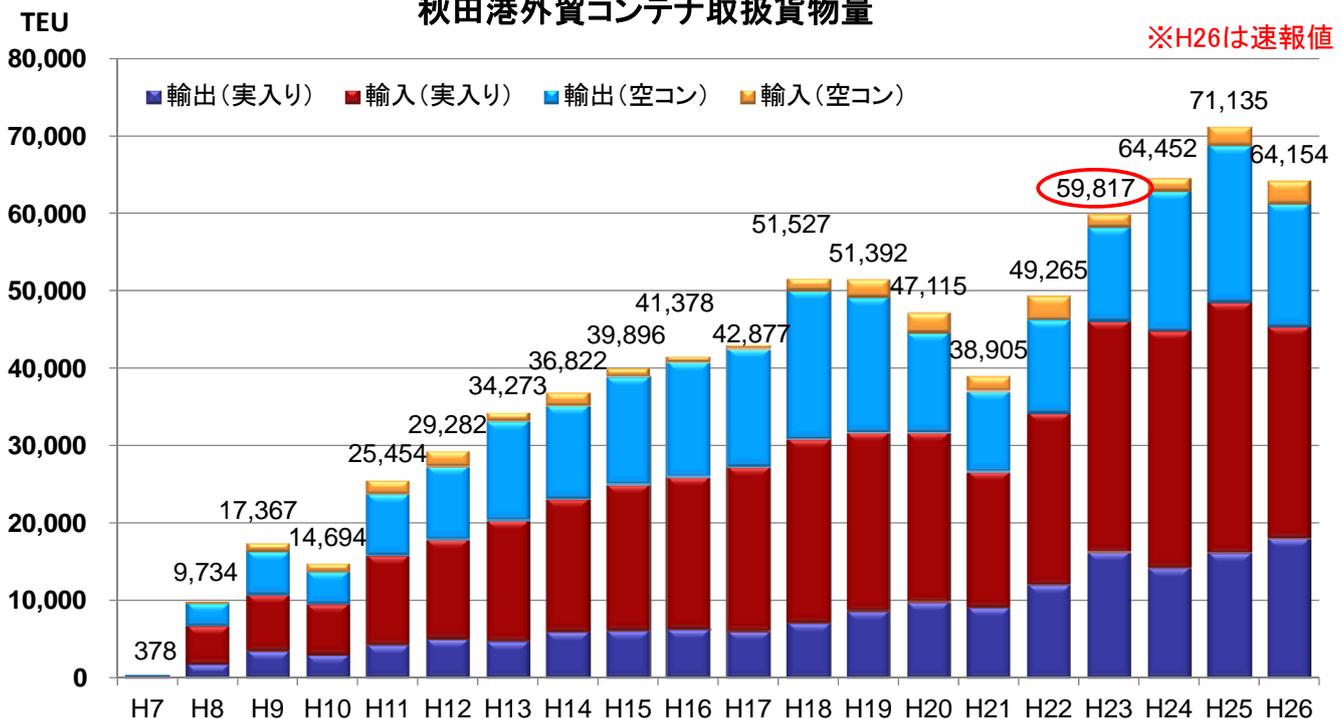
出展: 秋田県港湾統計年報

秋田港コンテナ取扱の推移

H23年以降3年連続で過去最高を記録。

秋田港外貿コンテナ取扱貨物量

※H26は速報値



出展: 秋田県港湾統計年報